

メアリ・シェリーはカノン作家か：  
メアリ・シェリー研究 30 年史

市川 純

序

1996 年のピカリング (Pickering & Chatto) 版小説集 *The Novels and Selected Works of Mary Shelley* の出版、そして 1997 年のメアリ・シェリー (Mary Shelley) 生誕 200 年記念の年といった、メアリ・シェリー研究を大いに盛り上げた時期からおよそ 15 年経った。メアリ・シェリー研究に必要な一次資料は充実し、多くの論考や伝記、関連書籍が刊行されるようになった。では、このメアリ・シェリー再評価によってメアリはカノン作家となったのであろうか、それが本論の提起する問題である。なお、ここでいう「カノン作家」とは、その作品がカノンとみなされている作家という意味である。実は、メアリ・シェリーをカノン作家としてみなすには大きな問題がある。それは、彼女を再評価してきた研究上の立場などが大きく関係している。どのような問題か。本論ではメアリ・シェリーの研究史を批判的に紐解きながら、その問題について考察するが、序論ではその研究史を概観して問題となる箇所を挙げる。

メアリ・シェリーのアカデミックな評価は、1970 年代末におけるフェミニスト研究者による研究成果により初めて高まりを見せた。ただし、それはもっぱら『フランケンシュタイン』(*Frankenstein, or the Modern Prometheus* 1818) に基づくメアリ・シェリーの評価であり、その他の作品はほとんど省みられていなかった。この時点において、メアリは『フランケンシュタイン』の作家としてのみ、その重要性が強調されていた。

その後、80 年代に書簡や手記が刊行され、1993 年にはオードリー・A・フィッシュ、アン・K・メロア、エスター・H・シヨア (Audrey

A. Fisch, Anne K. Mellor and Esther H. Schor) の編集による『フランケンシュタイン』以外の作品を中心的に取り上げた論叢 *The Other Mary Shelley* が刊行される。これによって一気に『フランケンシュタイン』以外の作品への注目が促され、1996年にはピカリング版の小説集が出版された。これはメアリ・シェリー研究にとって革命的な出来事であり、『フランケンシュタイン』以外のそれまで日の目を見ず、19世紀以降に再版されていなかった小説が広く入手しやすくなった。ノラ・クルック (Nora Crook) は2000年に出版された *Mary Shelley's Fictions: From Frankenstein to Falkner* に寄せた序文の中で、「『フランケンシュタイン』作家の段階」(‘Author of *Frankenstein*’ phase) から、「『フランケンシュタイン』ではない」、或いは「その他のメアリ・シェリー」の段階」(‘Not *Frankenstein*’ or ‘Other Mary Shelley’ phase) への以降がこの時期に見られると述べた (xix)。しかし、『フランケンシュタイン』以外の作品として評価され始めたのは、主に『ヴァルパーガ』(*Valperga: or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* 1823) や『最後の人間』(*The Last Man* 1826)、『マチルダ』(*Matilda* 1959) といった前期の作品ばかりであった。何故このような事態になったのか、その原因をクルックは述べていない。むしろこの現象をあくまで「傾向」(*tendency*, xxv, note 4) とのみ記述することで、問題の核心の考察を避けているようにも思われる。しかし、ここにはこれまでのメアリ・シェリー研究を反省し、今後の動向を見る上で重要な原因が潜んでいるように思われる。この問題の詳細は本論にて述べる。

その後2000年の時点でクルックは今や「包括的メアリ・シェリー」(‘The Inclusive Mary Shelley’) の段階へと突入していると述べている (xx)。クルックが序文を書いた論叢は、題名が示す通りメアリ・シェリーの長編小説全てを取り上げており、包括的なメアリ・シェリー像を模索するものである。しかし、「包括的メアリ・シェリー」の時代が宣言されて10年を経た今、果たして本当に包括的と言える状態にあるだろうか。

メアリ・シェリーの研究史は、『フランケンシュタイン』作家から、それ以外の作品をも著した作家としての評価へと発展してきた。その過

程において、彼女がカノン作家として位置づけられるにあたり、我々は何をもって彼女をカノン作家とみなすのかどうかを考察する必要がある。特に、包括的研究を目指してきた研究史があるのならば、その包括的視野に立った上で、彼女がカノン作家であるかを考える必要がある。本稿は、これまでのメアリ・シェリー研究史を踏まえ、メアリ・シェリーがカノン作家かどうかを考察することで見えてくる、今後のメアリ・シェリー研究の動向について考察する。

### 1. 『フランケンシュタイン』のカノン化

確認できる限り、メアリ・シェリーを最初にカノン作家として裏付けようと試みたのは、ハリエット・クレイマー・リンキン (Harriet Kramer Linkin) である。彼女は 1989 年の秋にアメリカの 313 の大学を対象にアンケートを送付し、イギリス・ロマン主義文学の授業においてどのような作家が教えられているのかを調査した。回答のあった大学は 164 校、回答率は 53.3% であった (548-50)。この調査結果によれば、ロマン主義の授業において取り上げられる上位 10 人の作家は以下ようになる。

ROMANTIC PERIOD WRITER PERCENTAGES

Writer	%	#	(140)
Keats	99	139	
Coleridge	99	138	
W. Wordsworth	96	135	
P. Shelley	96	134	
Byron	94	131	
Blake	91	128	
M. Shelley	56	78	
D. Wordsworth	49	68	
Hazlitt	41	57	
C. Lamb	32	45	

(Linkin 564)

6 位のウィリアム・ブレイク (William Blake) との間には数値の上で開きがあるが、それでもブレイクに次ぐ 7 位の座を射止め、半分を超える

ロマン主義の講座でメアリ・シェリーが取り上げられていることが分かる。さらにリンキンは、1990年にステイーヴン・ベーレント (Stephen Behrendt) 編 *Approaches to Teaching Shelley's "Frankenstein"* が出版されたことを挙げ、メアリ・シェリーは従来のロマン主義における代表的な6大詩人のカノンに加わる第7の作家であると主張している(560)。

しかし、以上の理由をもってメアリ・シェリーをカノン作家とみなすには問題がある。リンキンの調査はあくまでメアリ・シェリーがロマン主義の講座で取り上げられているということのみ明らかにするものであり、具体的な作品名は挙げられていない。だが、ここで取り上げられている作品は恐らく主に『フランケンシュタイン』であろう。調査が行われた年代から推測しても、その他のメアリの多くの小説は入手しにくかった時代である。また、ベーレント編集の著作も、もっぱら『フランケンシュタイン』を取り上げるものである。ここでは、メアリ・シェリーのその他の作品の検証を待たず、包括的作家像が明確化されないうちに、『フランケンシュタイン』だけをもってカノン作家に仕立て上げられている。メアリ・シェリー研究史においては、これまで『フランケンシュタイン』以外の作品を積極的に論じようという試みがなされ、「包括的」なメアリ・シェリー像が求められてきた。このような流れがある中、他の作品を詳しく考察せずに『フランケンシュタイン』一作でメア리를カノン作家とみなすことには問題があるのではないか。もちろん、ある作家がカノン作家となるためには、その作家の全ての作品がカノンにならなければならない必要性はないが、作家の全体像が分からないうちに一つの作品だけを取り上げてカノンに仕立て上げるのは問題であろう。

とはいえ、『フランケンシュタイン』以外のメアリ作品に注目しようという動きが起こったのは、それ以前に『フランケンシュタイン』が学術的に十分注目されたからであり、その点は十分評価しなければならない。特にメアリ・シェリー研究の初期において、彼女が大々的に取り上げられるようになったことの火付け役であるエレン・モアズ (Ellen Moers) による1976年発刊の *Literary Women* やサンドラ・M・ギルバートとスーザン・グーバー (Sandra M. Gilbert and Susan Gubar) によって

1979 年に出版された *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* は、70 年代後半のフェミニズム批評書としても確固たる地位を占めている。これらの著作による発掘があったからこそ、80 年代以降のフェミニズム批評からのメアリ・シェリー研究、つまり 1984 年のメアリ・プーヴィ (Mary Poovey) による *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen* や 1988 年のアン・K・メロア著 *Mary Shelley: Her Life, Her Fiction, Her Monsters* といった、今日でもしばしば引用される文献が登場することになった。

上記文献の中でも、メロアは当時まだ再版されていないメアリ作品を積極的に論じ、包括的なメアリ・シェリー論を構築しようとしたところに大きな功績を残したと言えるが、議論の大部は『フランケンシュタイン』に費やされている。また、メアリの後期作品である『ロドア』(Lodore 1835) や『フォークナー』(Falkner 1837) は前期の作品の考察から得られた知見の延長線上で議論されている。つまり、『フランケンシュタイン』や『ヴァルパーガ』、『最後の人間』に顕著な、女性を搾取するものとしての男性像が強調され、一見男女間に望ましい関係が構築されているような後期の作品にも、そこには近親姦的、サドマゾ的欲望、及び性的な搾取の再生産が見られるというのである (218)。メロアの議論では、一貫して女性は男性による性的搾取の対象として捉えられている。

このような女性の搾取という問題を、メアリ・シェリーが母メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) の『メアリ』(Mary, a Fiction 1788) や『女性の虐待、或いはマライア』(The Wrongs of Woman, or Maria 1798) のように告発する形式で描いていれば、それはフェミニズム批評から積極的に評価し得たかもしれない。しかし、メアリが後期作品で描いたのはあくまで家族間や夫婦間の睦まじい関係性であって、メロアはそこに男女間における搾取の問題を読み取っている。これは、メアリが肯定的に描いた親子像、夫婦像を消極的に読み解くものである。メロアは、メアリの後期作品を男性権力者に対して闘争するという意味でのフェミニスト的な作品として評価するのではなく、フェミニスト的

な視点から見て既存の親子間、夫婦間における搾取関係が女性の中に内在化されてしまった状態を図らずも提示している資料の一つとして捉えている。

とはいえ、メアリ・シェリーがアカデミズムの世界で評価されるようになったのは、フェミニズム批評家たちの功績によるところが大きい。そして、フェミニズム批評だけが批評理論として都合がよかったというわけではなく、メロアも心理学や文化人類学、マルクス主義、新歴史主義といった視点を取り入れている (xii)。メアリ・シェリーの評価は比較的新しいため、他のカノン作家と違うのは、個々の批評理論の趨勢によって評価が変動するのではなく、様々な批評理論を一気に浴びたということである。ジャン・ジャック・ルセルクル (Jean-Jacques Lecercle) が 1988 年に上梓した *Frankenstein, mythe et philosophie* や、廣野由美子によって 2005 年に出版された『批評理論入門——「フランケンシュタイン」解剖講義』には様々な批評理論がこの作品に適用できることを示している。ただし、様々な批評理論の嵐の中を真に耐え抜いてカノン然としているのは、やはり『フランケンシュタイン』だけなのではないだろうか。

そこで、次章では『フランケンシュタイン』以外の作品の評価がどの程度メアリをカノン作家に位置づける貢献をしているのか、或いは否か、客観的なデータを提示しながら考察する。

## 2. 『フランケンシュタイン』以外の非カノン化

1993 年に出版されたジェイン・ブランバーク (Jane Blumberg) の *Mary Shelley's Early Novels* はその名の通り後期作品を全く評価しなかったが、『フランケンシュタイン』以外に『ヴァルパーガ』と『最後の人間』を積極的に評価した点は重要である。同年には *The Other Mary Shelley* も出版され、1997 年にはシンディ・M・コンガー、フレデリック・S・フランク、グレゴリー・オウデイ (Syndy M. Conger, Frederick S. Frank, and Gregory O'Dea) 編 *Iconoclastic Departures: Mary Shelley after Frankenstein: Essays in Honor of the Bicentenary of Mary Shelley's Birth* が刊行される。その後、2000 年のベティ・T・ベネットとステュアート・

カラン (Betty T. Bennett and Stuart Curran) 編による *Mary Shelley in Her Times* や、マイケル・エバーリ - シナトラ (Michael Eberle-Sinatra) の *Mary Shelley's Fictions: From Frankenstein to Falkner*, 2003 年のエスター・ショア編 *Cambridge Companion to Mary Shelley* は積極的に『フランケンシュタイン』以外の作品を論じ、紹介した。これらの著作により、我々は「その他のメアリ・シェリー」、さらには「包括的メアリ・シェリー」の段階に向かっているかのようにも見える。

しかし、これらは一人の著者による包括的視点によって書かれたものではなく、あくまで論叢であることに注意しなければならない。つまり、論者によって個々の作品に対する視点はばらばらであり、メアリの作品全体を見渡した上での一貫した評価とは言えないのだ。これでは、個々の作品をメアリの作品全体の中で位置づけることは不可能である。また、メアリ・シェリーをカノン作家として考察するには、一定の評価軸の元にそれぞれの作品の位置づけを探らねばならないが、それが成されていないということは、『フランケンシュタイン』とそれ以外の作品とを結びつけた全体的な視点の中で論じることの困難も伺わせる。

もちろん、上記の著作によって『フランケンシュタイン』以外の作品にも論じる機会が生まれたことは意義深い。それまでほとんど論じられていなかったのであるから。しかし、これらの著作が出てから、メアリ・シェリー批評の変革が起こったと言えるのか、実はここに大きな疑問がある。これらの著作が出たこと自体は一種の変革かもしれないが、その後の流れを見ると、決して楽観視できない事態が起こっているのである。

参考データの一つとして、2011 年 10 月 7 日に *MLA International Bibliography (Electronic Resource)* を利用したところ、言語を限定せずキーワードに “mary shelley” と打ち込むと、全部で 1462 件がヒットした。次いで、メアリ作品のうちどの作品が最も論じられているのかを調査するため、先のキーワードに個々の作品名を足して検索してみた。すると、“mary shelley + frankenstein” では全部で 639 件、“mary shelley + valperga” では 26 件、“mary shelley + last man” では 66 件、“mary shelley + perkin warbeck” では 7 件、“mary shelley + lodore” では 15 件、



“mary shelley + falkner”では23件、比較のために中編小説の『マチルダ』も加えると、“mary shelley + mathilda”では36件がヒットした。このデータから単純に考えれば、最も論じられている作品は『フランケンシュタイン』、次いで『最後の人間』、『マチルダ』、『ヴァルパーガ』、『フォークナー』、『ロドア』と続くことがわかる。ただし、文献数の最も多い『フランケンシュタイン』と、次席の『最後の人間』の間には歴然とした差があり、前者以外の作品をカノンと位置づけることの難しさが表れている。また、それを考慮に入れた上で全体の作品を眺めても、論じられている作品は前期のものに集中している。なお、その他のメアリの作品である『六週間の旅』(*History of a Six Weeks' Tour*)や『ドイツ・イタリア紀行』(*Rambles in Germany and Italy*)を加えた検索もしたが、それぞれ4件及び7件と、極めて低い数字が出た。

抽出したデータを最近30年に区切って各年毎に表にしたのが表1と表2である。文献によっては発行年月が“2010 Nov-2011 Feb”や、“1999 Spring-2000 Winter”などとなっていることもあり、その際はそれぞれの早い方の年、つまり“2010 Nov-2011 Feb”であれば2010年のものとして、“1999 Spring-2000 Winter”であれば1999年のものとして扱う。

“mary shelley”でヒットする文献は90年代に入って一気に高まり、特に1997年と2000年にピークを迎えている。その他の作品を合わせて検索した場合も同じ傾向が見られる。では、なぜこの二つの年なのか。

1997年はメアリ・シェリー生誕200年の年であり、*Iconoclastic Departures*のような論集が編まれたり、様々な記念学会が開かれたりした。この年に多くの文献が登場したのはそのためであると思われる。前年のピカリング版小説集の出版はこの動きを後押ししていると言えるだろう。では、その後3年を経て2000年に再び文献数が大きく伸びるのは何故か。それは、この年になって生誕200年記念の成果が現れたからである。この年に出た *Mary Shelley in Her Times* は1997年5月に行われた the Keats-Shelley Association of America の国際会議が元になって編集されている (Bennett and Curran x)。また、*Mary Shelley's Fictions: From Frankenstein to Falkner* はその他英米、カナダでの様々な国際会議での発表を元に編まれている (Eberle-Sinatra ix-x)。



メアリ・シェリーはカノン作家か：メアリ・シェリー研究 30 年史

keywords				
year	mary shelley	mary shelley + frankenstein	mary shelley + valperga	mary shelley + last man
2010	40	12	2	2
2009	53	16	1	4
2008	60	36	2	3
2007	47	15	1	3
2006	48	21	1	1
2005	53	24	1	3
2004	40	11	0	1
2003	60	28	2	4
2002	37	12	1	3
2001	77	29	1	7
2000	95	43	5	5
1999	49	20	0	2
1998	37	12	2	2
1997	69	38	4	3
1996	44	20	0	3
1995	59	33	1	3
1994	53	31	1	1
1993	48	36	0	3
1992	50	28	0	1
1991	22	15	0	1
1990	47	23	0	1
1989	19	5	0	1
1988	19	10	0	1
1987	18	11	0	0
1986	16	6	0	1
1985	14	8	0	0
1984	13	4	0	0
1983	16	9	0	0
1982	12	2	0	1
1981	1	8	0	0

(表 1)

では、2000 年を過ぎてからの流れはどうであろうか。二つの年のピークを過ぎてからは、数値が下がっている。ブームは去ったと言えるのではないだろうか。もちろん、80 年代以前の状態ほど文献数が減少しているわけではないが、決して楽観視できない状態である。それに、論じ

keywords				
year	mary shelley + perkin warbeck	mary shelley + lodore	mary shelley + falkner	mary shelley + mathilda
2010	0	1	0	0
2009	0	0	0	1
2008	0	0	0	1
2007	0	2	2	1
2006	0	0	0	0
2005	1	1	1	4
2004	0	0	0	0
2003	0	0	0	2
2002	0	1	1	4
2001	0	2	0	0
2000	1	3	15	3
1999	1	1	0	1
1998	0	0	0	0
1997	2	2	2	6
1996	0	0	0	2
1995	0	0	0	2
1994	1	0	0	4
1993	0	0	0	1
1992	0	0	0	1
1991	0	0	0	0
1990	0	0	0	0
1989	0	0	0	1
1988	0	0	0	0
1987	0	0	0	0
1986	0	0	0	0
1985	0	0	0	0
1984	0	0	0	0
1983	0	0	0	0
1982	0	0	1	0
1981	0	0	0	0

(表2)

られるメアリ作品としては『フランケンシュタイン』が独走しており、その他に論じられているのは『マチルダ』や『最後の人間』、そして『ヴァルパーガ』といった前期の作品の方が多く、後期作品の評価が高まったとは言えない。後期の作品は、文献が整った今でもなお、相変わ

らず論じられる機会さえ少ないのである。それに、前期作品の方が後期作品よりも論じられているからといっても、数の上では『フランケンシュタイン』には遥か及ばない。このような状況において、「包括的メアリ・シェリー」という言葉を使うことは適切とは言えないのではないか。

### 3. 「包括的メアリ・シェリー」への段階突入を阻むもの

メアリ・シェリーを、その作品全体を包括した上でカノン作家と名乗らせることの困難をここまで確認してきた。では、今後の見通しとして、彼女が包括的研究を踏まえた上での真のカノン作家となる日は来るのだろうか。「包括的」という言葉が唱えられた後の MLA のデータを見ても、或いは昨今のメアリ・シェリー関連の出版物の流れを見ても、彼女の後期作品を大きく取り上げて、メアリ・シェリーの全体像を評価する動きは出ていない。これは何故であろうか。ここには今まで見てきた批評史の流れが絡んでいるのではないだろうか。

包括的メアリ・シェリー像を打ち出すためには後期作品をもっと検証しなければならないが、これまでの批評史の流れの中には幾つもの困難がある。フェミニズムの側からの難しさの一端は、先のメロアの例に示した。メロアに並ぶフェミニズム批評として、プーヴィの著作は後期作品の『フォークナー』を比較的大きく取り上げ、この作品が後期三作品の中で当時の女性としての「礼儀正しさ」(propriety) とそうでない側面の両立をもっとも明確に表しているという (160)。しかし、この論点が他の『パーキン・ウォーベックの運命』や『ロドア』においてどう扱われているのかは十分検証されておらず、あくまで最初の小説『フランケンシュタイン』に対し、『フォークナー』が最後の小説であるという点からのみ両者が比較され、その間の変化が強調されている。では、もしフェミニズム批評に限界があるのなら、その他の評価軸はないだろうか。

フランクはメアリの再評価を促した流れとして、ゴシック研究や SF への貢献という視点を示している (296)。これらは前期の作品や短編作品を評価する上での参考にはなるが、家庭や恋愛、結婚を主題とした作

品の検証をするには適用しにくい。それに、最近の批評の流れは、これまでのゴシックやSF、さらにはポップカルチャーといった視点ばかりにまみれた、『フランケンシュタイン』作家としてのメアリ・シェリーのイメージから脱却することを目指している。したがって、ゴシックやSFといったジャンルからのアプローチは包括性を目指す上では問題がある。

後期作品を含めた包括的研究を完成させるには、後期作品独自の特徴を評価できなければならない。では、後期作品を特徴付けているものは何か。プーヴィはそれを「女性のあるべき因習的期待」(“conventional expectations of what a woman should be” 116)を求めているところにあるとしている。また、ブランバークも述べているが(31)、前期において「急進的」(radical)であった作品は、後期になって「保守的」(conservative)で「順応的」(conformist)になったと一般的に評されている。このようなメアリの変化は彼女を取り巻いていた状況、つまり1822年に夫パーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelley)、1824年に親しかったバイロン卿(Lord Byron)が亡くなるなど、ロマン主義を作品と生涯両面にわたって実現した人物が相次いで彼女の元を去った影響が大きい。また、歴史的にも時代は安定し、保守化への道筋を辿っており、リサ・ヴァーゴ(Lisa Vargo)も、メアリが後期作品を発表した1830年代はロマン主義的なものが「原ヴィクトリア朝的見方」(proto-Victorian perspective)に取って代わられた時代であると評している(50)。

ならば、この保守的で因習に順応した側面を積極的に評価する以外、包括的研究を完成させることは不可能なのではないだろうか。それができなければ、このまま『フランケンシュタイン』のみ、或いは前期作品のみが評価されるメアリ・シェリー像を変えることはできず、「包括的メアリ・シェリー」研究の時代はついに到来しない。しかし、これには相当な困難を伴うことは確かである。そもそも、ロマン主義文学自体、その多くを急進的な活動や思想の上に成立させており、そこにこの文学の新しさや価値があるとされてきた。その延長線上にメアリ・シェリーが位置すると考えるのであれば、急進的でないメアリは、ロマン主義文学に価値を認める批評軸において評価できない。保守的、因習的作品に

価値を認めるためには、一度ロマン主義という枠から出る、或いはロマン主義に対抗するものとしてのメアリ・シェリー作品に焦点を当てなければならぬ。しかし、そのような試みはあまりなされていない。

### 結論

包括的視点から見渡せば、メアリ・シェリーをカノン作家とみなすことには問題がある。90年代になって、リンキンにより『フランケンシュタイン』はカノンになったとみなされたが、これはその他の作品の評価を経ないままに行われた。その後のメアリ・シェリー再評価の時代を経ても、評価の高さにおいてこの作品を超えるものはない。従って、やはり『フランケンシュタイン』がカノン扱いされていることは確かである。ただし、それは後期作品をあまり考慮に入れないうままになされている。もちろん、『フランケンシュタイン』のカノン化自体はメアリ・シェリー再評価の大きな収穫ではある。しかし、これだけではその後のメアリ・シェリー研究が目指してきた「その他のメアリ・シェリー」や「包括的メアリ・シェリー」は実現しない。恐らく、前期の作品の急進性に重きをおく限り、その作風が保守的で因習的なものに変化した後期の作品は評価できないのであろう。だが、たとえ『フランケンシュタイン』をもってメアリをカノン作家とみなすにしろ、彼女の作品全体の中でこの作品を評価しない限り、それは真のカノン作家とは言えないのではないか。

様々な批評的困難がある中で、包括的なメアリ・シェリー像を打ち出すにはどのような方法論が必要であるか。それは今まで評価されていなかった後期作品にも重きを置き、なおかつそこに向かって前期を接続する新たな批評態度である。本当に包括的な研究を目指すには、彼女の後期作品における保守性を一つの到達点として評価し、後期作品の特徴から前期作品を再評価するという態度が必要なのではないだろうか。

\*本稿は2011年12月3日に東京大学本郷キャンパスで行われた、日本シェリー研究センター第20回大会シンポジウム「シェリー研究の30年、成果と課題」において口頭発表したものに加筆・修正を加えたもの

である。有益なコメントを下された先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。

### Works Cited

- Behrendt, Stephen, ed. *Approaches to Teaching Shelley's "Frankenstein."* New York: MLA, 1990.
- Bennett, Betty T. and Stuart Curran. "Preface and Acknowledgments" to *Mary Shelley in Her Times*. ML: Johns Hopkins UP, 2000. ix-xi.
- Blumberg, Jane. *Mary Shelley's Early Novels: This Child of Imagination and Misery*. Iowa City: U of Iowa P, 1993.
- Crook, Nora. "Introduction" to *Mary Shelley's Fictions from Frankenstein to Falkner*. Ed. Michael Eberle-Sinatra. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2000. xix-xxvi.
- Eberle-Sinatra, Michael. "Editor's Preface and Acknowledgements" to *Mary Shelley's Fictions: From Frankenstein to Falkner*. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2000. ix-xi.
- Frank, Frederick S. "Mary Shelley's Other Fiction: A Bibliographical Census." in *Iconoclastic Departures: Mary Shelley after Frankenstein: Essays in Honor of the Bicentenary of Mary Shelley's Birth*. Eds. Syndy M. Conger, Frederick S. Frank, and Gregory O' Dea. NJ: Associated UP, 1997. 295-349.
- Linkin, Harriet Kramer. "The Current Canon in British Romantic Studies." *College English*. 53.5 (1991), 548-70.
- Mellor, Anne K. *Mary Shelley: Her Life, Her Fiction, Her Monsters*. New York: Methuen, 1988.
- MLA International Bibliography (Electronic Resource)*. New York: MLA, 2011 年 10 月 7 日利用.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. Chicago: U of Chicago P, 1984.
- Vargo, Lisa. "Mrs. Julian T. Marshall's *Life and Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*." in *Nervous Reactions: Victorian Recollections of Romanticism*. Eds. Joel Faflak and Julia M. Wright. Albany: State University of New York Press, 2004. 47-64.